バカと欠陥製品と人間失格

羅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと欠陥製品と人間失格

【Ｎコード】
Ｎ３９９０Ｔ

【作者名】
羅歩

【あらすじ】
いーちゃんこと戯言遣いと零崎人識（ぜろざきひとしき）が文月学園に通うことになったら・・・という感じの物語です。

キャラクター紹介

キャラクター紹介

いーちゃん（戯言遣い）

・物語の中では汀目（みぎわめ）　佚希（いつき）という偽名を使います。

零崎（ぜろざき）　人識（ひとしき）・・・・・（殺人鬼）

・物語の中では汀目（みぎわめ）　俊希（としき）と名乗ります。

哀川（あいかわ）　潤（じゅん）・・・・・（請負人）

玖渚（くなぎさ）　友（とも）・・・・・（技術者）

吉井（よしい）　明久（あきひさ）

坂本（さかもと）　雄二（ゆうじ）

姫路（ひめじ）　瑞希（みずき）

木下（きのした）　秀吉（ひでよし）

島田（しまだ）　美波（みなみ）

土屋（つちや）　康太（こうた）

キャラクター紹介（後書き）

初めまして。羅歩（らぽ）といいます。
今回、投稿するのが初めてな初心者ですががんばっていくつもりです。
学生なので投稿が遅くなるかもしれませんが宜しくお願いします。

~プロローグ～

「なぁ、いーちゃん文月学園って知ってるか？」

いきなり哀川さんがそんなことをいってきた。

哀川（あいかわ）　潤（じゅん）

職業請負人、性別女性。身長かなりの長身、胴体短く脚が長い。スタイル、プロポーション、共に極上。

全身くまなく原色の赤を基調としているところに若干の問題点があるけれど、それ以外の点ではけちのつけようもないオーダーメイドのスーツ姿。

百人が百人まで認める美貌の持ち主。ただしその異様なまでの目つきの悪さを除けばだ。

「まぁ、少しぐらいなら知ってますよ」

「どれくらい？」

「えっとー・・・「試験召喚システム」というのを取り入れた学園でしたよね。

友があの学園の制服がかわいいって絶賛でしたし、玖渚機関もそのシステムに手を貸しているって聞　きました。」

「ふーん。じゃあいーちゃんにまかせても大丈夫だな！」

「・・・は？」

「いやー、こういうのはいーちゃんにぴったりだと思うしなー」

なんだかいやな予感がする・・・

「あの・・・どういうことですか？」

「ん？いーちゃんが行くって事だよ」

「・・・どこに・・？」

「どこって文月学園に決まってんじゃん」

「どうして僕が行かなきゃならないんですか！？」

これでも大学生なんだぞ！

「いやー玖渚ちんに頼まれてさー、「試験召喚システム」の実用化されてどんな感じなのか調べてきてほしいってさー」

「それと僕と何も関係ないと思うんですが・・・」

「んー、気まぐれ？」

はぁ、この人は・・・

「わかりましたよ。行けばいいんでしょう？それに友のお願いですしね」

「おお！いーちゃん話が早いぜ！そんじゃ、今から車でいくぞーあっちの方の家も用意してあることだしな！」

準備万端だな哀川さん・・・まさか仕組んだのか・・？

そして僕は哀川さんと車で目的地まで行くこととなった。

~プロローグ～（後書き）

こんな感じでしょうか・・・？

次回、零崎登場！

~プロローグ2～

「あの・・哀川さん・・」

「あたしのことは名字で呼ぶなって、何度も言ってんだろ。ん？」

哀川さん肩が痛いです・・・

「そうでしたね、潤さん　でも、この状況はなんですか？」

今僕たちがいるのはとあるマンションの一室まぁこれから僕が住む部屋なんだけどね。

「この状況って？」

「なんで零崎がここに紐でグルグル巻きにされているってことです！！」

僕たちの目の前には零崎　人識が縄で逃げられないように何重にもグルグル巻きにされていた。

零崎（ぜろざき）　人識（ひとしき）

殺人鬼　性別男性。顔面刺青の少年。

男性としては小柄な体格。まだらに染められた髪、右耳には三連ピアス左耳には携帯電話用のものだと思われるストラップ。

タイガーストライプのハーフパンツ、上半身は、裸の上に直接、タクティカルベストを羽織っている。

「あー、いーちゃんのところに行く前に見つけてよーつかまえといた」

さらっと言ったよこの人・・・

「おい、欠陥製品」

「なんだ、人間失格」

「この縄解いてくんねーか？縄が痛くてしょうがねー」

「わかったよ」

僕は縄を解いて零崎を解放させた。

「なんだもう縄解いちまうのか面白かったのに」

「それで楽しむなんてあなたくらいですよ、潤さん」

「あー、やっと解放されたー。んじゃ俺はこのまま京都まで行くか」

「いや、待てよ零崎くんよーなんでここにお前を放置したのかわかんねーのか？」

「はぁ？」

「お前もあたしの仕事手伝えってことだよ」

「はぁーーー！！！なんで俺が手伝わないといけないんだよ！！」

「潤さんどういうことですか？」

「んー、気まぐれ」

またですか！！

「いいじゃねーかどうせお前お金とかあんま持ってないんだろう？だったらここでいーちゃんと住んであたしの仕事手伝ってくれやーいいじゃねーか」

「くっ、返す言葉がねー・・・」

本当にお金あんまないんだ・・・

「わかったよ、手伝えばいいんだろう手伝えば」

「ところで零崎は何をするんですか？」

「ん？いーちゃんと一緒に文月学園に入学すればいいだけだけど？」

はいはい僕と零崎が文月学園に入学ね・・・えっ・・？

「あとちなみにお前ら二人、双子ってことになってるから」

「「はぁーーー！！！」」

「なんで双子設定なんだよ！！というかなんで俺が学校行かなきゃなんねーんだよ！！」

「いいじゃんか。お前、中学しか行ってないんだろいい機会じゃねーか。それに双子設定はあたしの気分だ」

はっきり言ったよこの人・・・

「んじゃ、あたしは次の仕事あるから行って来るな。あと、零崎くん逃げたらどうなるか知ってるよな？」

「はいはい、わかってますよー・・」

「あと、お前らの入学は明日だからちゃんと行ってこいよそれにわかんない事あったら・・・

「友に電話しますから大丈夫ですよ」

「おう、いーちゃんはやっぱ分かってんなー」

さすがだぜと言って哀川さんは部屋を出て行った・・窓から・・・・・・

「「・・・・・えっ・・・・・？」」

哀川さんここ４階ですよ・・・

そして僕がそんなことを考えている間に哀川さんは窓から出て行った。

「さっすが、人類最強だぜ」

傑作だぜ。

「・・・戯言だよ。」

そしてぼくらの一日が過ぎていった。

~プロローグ2～（後書き）

次回、明久達が登場します。

第1問　入学とFクラス

ーーー第1問ーーー

問　以下の問に答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、
調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの変わりに用いるべき
金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路　瑞希の答え

『問題点・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例・・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋　康太の答え

『問題点・・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井　明久の答え

『合金の例・・・・未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

汀目　俊希の答え

『合金の例・・・・ジュラルミン（罪口商会に行けばいい鍋（武器）が手に入るぜ。）

教師のコメント

・・・・どこにあるんですか。

＊＊＊

哀川さんが部屋（窓）から出て行ったあと僕は友に電話をし、今の文月学園の事などをおおまかに聞いた後、零崎と明日あると思われる振り分け試験のため、久しぶりの勉強をした。

翌朝

「おい、零崎。準備できたか？」

「おう、誰かさんのせいでほとんど勉強だったからすげー寝みーけどな」

それを言うなよ。久しぶりだったんだし・・・

「んで、文月学園ってどこにあるんだ？」

「今から行くからついて来てくれればいいよ」

「かはは　そんじゃ、ついていくとすっか」

そして僕らはこれから通うことになる文月学園へと向かった。

「お前らが汀目（みぎわめ）兄弟か？」

僕らを玄関の前で呼び止めた方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男性が立っていた。

ちなみに、汀目という名字は零崎が中学の時まで使っていた名前らしい。

「あっ・・「「おはようございます」」

軽く頭を下げて挨拶をする。

「僕らに何の用ですか？えっと・・・」

「あぁ、生活指導の西村だ。汀目　俊希と汀目　佚希か？」

はい、そうです。と伝えると二枚の封筒を渡して来た。

「あの・・・これは何ですか？」

そこには大きく僕らの名前が書いてあった。

「それは振り分け試験のクラス編成の紙だが？」

・・・・・・え？

「ちょっと待ってください。僕らは今日、振り分け試験があると聞いて登校して来たんですが・・」

「お前らの試験は昨日だったはずだが・・・？」

えっ・・・どうしてだろうと思っているとき携帯の受信音が鳴っ

た。

まさか・・・・・

［宛先人］　哀川　潤

［本文］

そーいやー、昨日がいーちゃん達の振り分け試験だった～

まぁ、いーちゃん達なら何とかなるだろうしがんばってね～＼（＾▽＾）／

・・・・・あの人は・・・・・

僕は頭をかかえ、零崎は「あいつ・・いつか殺す」と呟いていた。

「おい、汀目兄弟大丈夫か？」

西村先生が心配しているので、僕は「大丈夫です」と言ってぶつぶつ呟いている零崎を引っ張りながら教室に向かった。

向かう教室は言うまでもないＦクラスだ。

途中、Ｆクラス担任の福原（ふくはら）　慎（しん）先生に会い、一緒にＦクラスに行く事となった。

＊＊＊＊

「では汀目君達はここで待って、呼んだら入って来てください」

「はい」「コロスコロスコロス・・」

「いい加減やめろ」

「皆さんおはようございます。いきなりですが今日のＨＲは編入生を紹介します。では汀目君達は入っ　てきてください」

もう出番か・・・

「いくぞ、人間失格」

「わかってるよ、欠陥製品」

「はじめまして、汀目（みぎわめ）　佚希（いつき）です。これからよろしくお願いします」

「同じく、汀目（みぎわめ）　俊希（としき）です。よろしくさーせん」

「それでは汀目君達の席は・・・空いてる所に座って下さい」

僕と俊希は一番うしろの窓際が空いていたのでそこにすわった。

ＨＲが終わり、まず初めに声をかけてきたのは、友から聞いてい

た吉井君だった。

「僕は吉井（よしい）　明久（あきひさ）。よろしくね」

観察処分者って聞いていたけど、意外と普通の子みたいだな・・・

ちなみに観察処分者というのは学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分らしく、

具体的には教師の雑用係らしい。力仕事やそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになっ　た試験召喚獣でこなす、メリットがあるように見えるが実際はデメリットが多い。

たとえば、物が触れるようになった召喚獣の負担は、何割かがフィードバックされると言った点など

らしい。

「わしは木下（きのした）　秀吉（ひでよし）じゃ。演劇部に所属しておるよろしく頼むぞ。

あと、よく間違われるがワシは男じゃからの」

よく間違われるのか・・・まぁ、かわいい顔してるからなのかな・・

「わかってるよ、秀吉君」

「普通に男だと思うぞー」

あれ？零崎さっきまで寝てたのに起きたのか・・

ガシッ

秀吉君が僕と零崎に抱きついてきた。

「おぬしらが初めてじゃ、わしを一目で男と見抜いたのは！」

そんなにうれしかったのか・・・ん？なんかクラスの人たちがシャーペンを構えてる！！

吉井君まで・・はぁ・・・

「俊希」

「んっ・・」

ビュッ（糸を投げる音）

「「「な・・・！！！」」」

「しょうりょ～」

さっきまでシャーペンを構えていた人はそこから一歩も動かなくなった。

「俊希、おぬし何をしたのじゃ？」

「ん？拘束しただけだけど？」

あれは零崎があまり使わないがいつも所持している曲弦糸だ。

ただ、零崎は殺人鬼なので普通の曲弦糸より殺人向きらしい。

「秀吉君、俊希が動きを止めている間にはなしてくれるかな？」

なんかこのクラスの人すごい目で見てくるな・・・

「すまないのじゃ、こんなに嬉しいのは久しぶりじゃからの」

「そうなんだ・・・」

秀吉君、苦労してるんだな・・・

オレはこのクラスの代表の坂本（さかもと）　雄二（ゆうじ）、そっちでシャーペンを持ちながらカメラを持ている奴は、土屋（つちや）　康太（こうた）こと寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」

「・・・・・！！ブンブンブンブン！！」

「拘束されながらも手で必死に否定してるけど・・・」

「シャイなんだ」

「へー」（ニヤニヤ）

「珍しいな、興味もったのか？」

「俺の周りにはこんなんいなかったしな」

しいて言うなら、変態くらいだ。

変態ね・・・零崎にそんな人いるんだ・・・

そして女子が二人。

二人ともかわいい。

「ウチは島田（しまだ）　美波（みなみ）。外国育ちで日常会話は出来るけど読み書きは苦手です。

趣味は・・・アキを殴ることです。」

すごい趣味の持ち主だな・・かわいいのに

「すげー趣味してんなー」

「待って、俊希！その返しは違うよ！！」

吉井君・・・ガンバ！

あと一人だけど、この子も個性的なものがあるのかな・・・

「あ、あの姫路（ひめじ）　瑞希（みずき）と言います。特技は料理です。よろしくお願いします」

常識のある子だった。一番まともな子だな。

そして、自己紹介も終わり、昨日Dクラスと召試戦争をしたらしく、吉井君達とテストをうけ、お昼は

瑞希ちゃんが作ってきてくれた弁当を皆で食べることになった。

第1問　入学とFクラス（後書き）

いーちゃんと人識くんの口調が不安です・・・あってますか？

感想書いてくれるとうれしいです。

第2問　昼休み

ーーー第2問ーーー

問い　以下の意味を持つことわざを答えなさい

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起こる喩え』

姫路　瑞希・汀目　佚希の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴っ　たり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

俊希君も佚希君みたいにちゃんと解答してくれるとたすかるんですけどね・・・

土屋　康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井　明久の答え

『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

＊＊＊

こんにちは。戯言遣いこと、汀目　佚希です。

僕らは今、学校の屋上で瑞希ちゃんが作ってきてくれた弁当を食べている所なのですが・・・・

バタン　（土屋君が倒れる音）　ガタガタガタガタ

この状況はどうしたらいいんだろう・・・・

土屋君が瑞希ちゃんの手作り弁当を食べた瞬間、豪快に顔から倒れ、小刻みに震えている。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

明久君、秀吉君、俊希と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!?」

瑞希ちゃんが慌てて、配ろうとしていた割り箸を取り落とした。

「・・・・・・・・（ムクリ）」

土屋君んが起き上がった。

「・・・・・・・・（グッ）」

そして、瑞希ちゃんに向けて親指を立てている。

『凄く美味いぞ』と伝えたいんだろうな・・・

「あ、お口に合いましたか？よかったですっ」

土屋君の言いたいことが伝わったのか、瑞希ちゃんは喜んでいる。

でも土屋君、まだ足が未だにガクガクと震えているよ。大丈夫かな・・・

「良かったらどんどん食べてくださいね」

瑞希ちゃんが笑顔で勧めている。

（秀吉、佚希、俊希。あれ、どう思う？）

瑞希ちゃんに聞こえないぐらいの小さい声で吉井君が話しかけて来た。

（・・・どう考えても演技には見えん）

それには僕も同感だ。

（だよね。ヤバイよね）

（おぬしら、身体は頑丈か？）

（正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから）

（俺はあれだけは絶対食いたくないぞ）

（僕、そんなに胃袋に自信はないな・・・）

表情は当然笑顔のままだった。瑞希ちゃんにこの会話と僕らの驚愕を気取らせるわけにはいかないし　ね。

（ならば、ここはワシに任せてもらおう）

勇気のある秀吉君の台詞が囁かれる。

（勇気あんなー、お前）

（そんな、危ないよ！）

（大丈夫じゃ。ワシは存外丈夫な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのじゃ）

見かけによらずタフな内臓らしい。ジャガイモの芽って毒なんだけどな・・・

（でも・・・）

（安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じてー）

秀吉君が誰よりも男らしい台詞を言おうとしたところで、

「おう、待たせたな！　へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

坂本君登場。

「あっ、雄二」

止める間もなく素手で卵焼きを放り込み、

パク　　バタンーーガシャンガシャン、ガタガタガタガタガタ

ジュース缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本!?ちょっと、どうしたの!?」

遅れてやってきた美波ちゃんが坂本君に駆け寄る。

・・・・間違いない。コレは本物だ・・・・。

土屋君同様激しく震える坂本君を見る。

すると、坂本君は倒れたまま吉井君をじっと見て、目で何かを訴えていた。

『毒を盛ったな』僕にはそう訴えているように見えた。

吉井君も目で返事をしているようだ。

「あ、足が・・・・攣ってな・・・・」

瑞希ちゃんを傷つけないようにかウソをついている。

坂本君、優しいね。

「あはは、ダッシュで階段を昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「そうなの?坂本ってこれ以上なくらい鍛えられていると思うけど」

事情がわかっていない美波ちゃんが不思議そうな顔をする。どう

したらいいだろう・・・

「ところで島田さん。その手をついているあたりにさ」

吉井君がビニールシートに手をおろしている美波ちゃんの手を指差した。

「ん？何？」

「さっきまで虫の死骸があったよ」

「えぇっ！？早く行ってよ！」

慌てて手をよけている。美波ちゃんを退場させるための嘘のようだ。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がいいよ」

「そうね。ちょっと行ってくる」

席を立つ美波ちゃん。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

はっはっは、と男４人（いーちゃんは入っていない）で朗らかに笑う。

一方その後ろでは必死に作戦会議を行っていた。

（明久、今度はお前がいけ！）

（む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう！）

（死ぬきで食えばいいんじゃねーか（明久だけ））

（俊希！僕をころす気！！）

（流石にワシもさっきの姿を見ては決断が鈍る・・・）

（ちょっと瑞希ちゃんに食べ物に何を入れたのか聞いてみようか？普通のだったら腹痛だけでおさまるだろうし）

（そうだね！佚希、聞いてみてくれる？）

（わかったよ）

「瑞希ちゃん」

「あっ、はい。何ですか？」

「この弁当のなかに何か隠し味とか入れた？」

「えっと・・・。硫酸を少々・・・」

「・・・・・」

これはダメだ・・・・

吉井君達は小刻みに震えている。

俊希は傑作だ。と言っている。

「・・・瑞希ちゃん、それは入れちゃいけないものだよ」

「え・・・でも、酸味を出すには・・・」

これはちゃんと行っておかないと。

「酸味はほかの食材で出せるよ。でも、硫酸は身体に害を及ぼすから入れちゃいけないよ」

「はい・・・」

瑞希ちゃんは少し半泣きだけどじょうがない。言って置かないと僕らが危ないしね。

（佚希、ありがとね）

（恩に着る）

（すまぬのう、佚希）

（さすがだぜ）

（戯言だよ）

そして僕らは売店でパンを買い、昼食をとった。

第2問　昼休み（後書き）

第3問　昼休み2

ーーー第3問ーーー

問　以下の英文を訳しなさい。

［Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ.］

姫路　瑞稀の答え

［これは私の祖母が愛用していた本棚です。］

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

汀目　佚希・俊希の答え

［これは私の祖母が愛用していた本棚です。］

教師のコメント

正解なんですが、どうして二人とも答えのあとに戯言だけどね。傑作だ。と入れているんですか？

土屋　康太の答え

［これは　　］

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか。

吉井　明久の答え

［☆●◆▽」♪＊×　　］

教師のコメント

できれば地球上の語言で。

＊＊＊

「どういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

「Ｄクラスと昨日試召戦争したのに？」

「あ、そっか。佚希達は知らなかったけ」

昼食を終え、皆でのんびりお茶をすすっている。

「僕らの目標はAクラスなんだ」

目標高いな・・・

「じゃあ次はAクラスなの？」

「いや、Bクラスだ」

Bクラス？目標はAクラスなのに・・・？

「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

僕が疑問に思っている時に明久君が質問した。

明久君も知らなかったの？

「正直に言おう」

坂本君が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

キッパリ言ったよ・・・

まぁ、友から聞いた限りでもAクラスはすごいらしいしね。戯言だけど。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

・・・Aクラスは勝てないって言ったのに？

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

明久君が美波ちゃんの台詞を引き継ぐように間にはいった。

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

なるほど。そういうことか

「一騎打ち？どうやって？」

明久君はまだわかっていないみたいだ。

「Bクラスを使う。

試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

「え？　も、もちろん！」

知らなさそうだな・・・

（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされる

んですよ）

瑞稀ちゃんのは助け船が来た。

「設備のランクを落とされるんだよ」

そのまま言ったね・・・

「・・・・まぁいい。つまり、Bクラスなら Cクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムッツリー二、ペンチ」

「ややっ。僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

「ペンチじゃなくて、いい切れ味のナイフならあるぜ」

「俊希！？どうしてそんなこと言うの！！」

「そりゃー面白そうだからな」

遊んでるな。完璧に。

「相手のクラスと設備が入れ替わっちゃうんですよ」

瑞稀ちゃんのフォローがまた入る。優しい子だな。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。

設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるくらいならCクラス設備で済むからな。

まずうまくいくだろう」

坂本君はうまく計算している。どこかの策士さんみたいだな。

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどねー」

「じゃが、それでも問題があるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては

一騎討ちよりも試召戦争のほうが確実であるのは確かじゃからな。それにーー」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？こちらには姫路がいるということは既に知れ渡っている
ことじゃろう？」

瑞稀ちゃんそんなに頭いいんだな。本当はＡクラス確定なのに風邪ひいたらしいし。

「そのへんに関しては考えがある。心配するな」

自身満々にいう坂本君。

「とにかくＢクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Ｂクラスに行って宣戦布告して来い」

「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

明久君が坂本君の頼みを断っている。なにかあるのかな？

「それなら僕が行ってこようか？」

「え？」

「いいのか？」

「まあ暇だしね。俊希も行くでしょ？」

「行ってもいいぜ。楽しそうだしな」

「んっじゃ頼んだぞ」

「がんばってね。俊希、佚希」

そして昼食はお開きになり、午後のテストが始まった。

＊＊＊

「ただいま」

「言ってきたぞー」

午後のテストも無事終了し、放課後僕らはＢクラスに宣戦布告をして帰ってきた。

「おー、無事だったか」

「大丈夫だったの二人とも！？」

明久君は驚いた顔をしている。まぁ、無理もないか・・・

「大丈夫だったよ。俊希がいたしね」

「いきなり襲いかかってきたな。ありゃー傑作だったぜ」

「まっ、無事戻って来たし帰るか」

「そうだね」

「僕らも帰ろうか俊希」

「・・・おー」

「・・・？」

俊希の目線をおってみると瑞稀ちゃんがキョロキョロとあたりを見回していた。

何か大切なことでもあるのかな？

「見てないでいくぞ人間失格」

「わかってるよ欠陥製品」

そして僕らは瑞稀ちゃんに気づかれないように教室を出た。

第４問　Ｂクラス戦前

ーーー第４問ーーー

問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（　）である』

姫路　瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋　康太の答え

『寄せては返すもの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井　明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もＲＰＧは好きです。

汀目　俊希の答え

『赤いものが出るもの』

先生のコメント

・・・赤いもの？

＊＊＊

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本君が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところだ。

「午後はＢクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気はあるか？」

『おおっー！』

一向に下がらないモチベーション。Ｆクラスの唯一の武器といっ

たところかな。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

男のノリについていけないのか若干引き気味な瑞希ちゃんが一歩前に出る。

『うおおっー！』

一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

今回は廊下での戦闘で勝ちに行くらしい。ここで負けると話にならないから、戦力もFクラス五十二人中四十人を注ぎ込む。そこには瑞希ちゃんもいるし大丈夫かもね。

「そういえば佚希達は前線部隊じゃないんだね」

「ああ、坂本君の護衛とか観察担当だからあんまり表にはでないと思うよ」

「へー、佚希は分かるけど俊希は意外だなーこういうこと好きそ

うだし」

それは合ってるよ

「僕らはだいたい二人でいる方がいいんだ」

「なんで？」

吉井君がよく分からないような顔で首を傾げている。

「簡単に言うと召喚獣の相性ってことだ」

「俊希、起きたんだ」

「へ？俊希もしかしてテスト受けてない！？」

「ちゃんと受けてるよ明久君」

テストが始まるたびに僕が起こしたしね。

「そっか、じゃあ雄二の護衛がんばってね」

「吉井君もね」

「うん！」

キーンコーンカーンコーン

昼休み終わりのベルが鳴りいよいよBクラス戦が始まった。

第４問　Ｂクラス戦前（後書き）

作者「はい！始まりました！雑談のコーナー！」

いーちゃん「・・・はい？」

人識「はぁ？」

作者「おやおや二人共よく分かっていないようですなー」

人識「当たり前だろうがいきなり始めやがって」

いーちゃん「どうしていきなり雑談なんですか？」

作者「いや～実を言うと、この４話かいたのこれで４回目だったりするんだよ」

人識「・・・は？」

いーちゃん「・・・どういうことですか？」

作者「簡単にいうとバク」

人識・いーちゃん「・・・・」

作者「沈黙しないで悲しくなるから」

いーちゃん「なんというかお疲れ様です」

作者「うん。疲れた」

人識「・・・傑作だぜ」

作者「という訳だからこれから雑談これからもしていいかな？」

いーちゃん「まぁいいですよ」

人識「暇だしな」

作者「やったー！！」

作者「それでは、今回はここまです。感想待ってます！せーの」

全員「「これからも宜しくおねがいします」」

第5問　Bクラス戦！一日目前半

ーーー第5問ーーー

問　以下の問に答えなさい

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

汀目　俊希の答え

『奇野師団（きのしだん）に聞けば一発でわかる（ちなみに答えはC6H6）』

教師のコメント

答えだけ書いてください。

土屋　康太の答え

『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

『君は科学をなめていませんか。』

吉井　明久の答え

『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント

あとで土屋君と職員室に来るように。

＊＊＊

昼休み終了のベルが鳴り響く。

「よし、いって来い！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

前線部隊の人たちは全力でＢクラスへと向かう廊下を駆け出した。

すごい勢いだと思う・・・

俊希は隣で楽しそうに傑作だと言っていた。

「俊希、よかったのか？」

「・・・なにが？」

「前線部隊に行かなくて」

俊希はめんどくさそうな顔をしながらあのなーと、ため息をつきながら言う。

「明久にも言っただろうが、俺らは二人でいた方がいいって」

「そうだけどお前は一人でもできるだろ」

「お前がいると便利なんだよ」

・・・便利ね・・・

まぁ、僕にとってもいた方が都合がいいんだけどね。

戯言だけど。

「おい、早くしないとBクラスの奴らと接触するぜ」

見ると前線部隊の前にゆっくりとした足取りでBクラスのメンバーが歩いてくる姿があった。

「わかった。Bクラスとやらないようにしろよ」

「わかってるよ。俺らはあくまで観察だろ」

俊希はニッとこちらに笑って見せてきた。

「・・・そうだね」

そして僕達もBクラスの人たちに見つからないように廊下を駆けていった。

＊＊＊

僕らが前線部隊に追いつくころには戦闘は始まっていた。

見ると圧倒的な実力差に第一陣がことごとくやられていた。

「お、遅れ、まし、た・・・。ごめ、んな、さい・・・」

息を切らしながら瑞希ちゃんがやってきた。瑞希ちゃんには全力疾走はついて来れなかったのかな。

「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫んだ。

そしてその声を聞いたBクラスの目つきが変わった。完璧に警戒しているな・・・

「長谷川先生、Bクラス岩下律子（いわした りつこ）です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

早速勝負を挑まれている瑞希ちゃん。向こうは早く倒しておきたい相手って事なんだろう。

「律子、私も手伝う！」

その後ろから、さらにもう一人Ｂクラスの女子が召喚を開始。二人ががりか・・・

よほど警戒してるんだな・・・

『試獣召喚！』（サモン）

喚声に応えて魔方陣が展開。試験召喚獣が顔を出す。

敵の二体は剣と槍を構え、瑞希ちゃんの方は大剣を軽々と持っている。

三人そっくりな召喚獣。だが、瑞希ちゃんの召喚獣と敵の召喚獣には一箇所違うところがあった。

それは大剣の他に左手首に綺麗な腕輪をしていることだ。

「ん？あれなんだ？」

「見てればわかるよ」

「そ、それって！？」

「私達で勝てるわけないじゃない！」

向こうの二人はそれを見て顔色を変える。

「じゃ、いきますね」

瑞希ちゃんが小さな手をキュッと握り込む。その動きに合わせ瑞希ちゃんの召喚獣が左腕を敵に向けた。

「ちょっと待ってよ！？」

「律子！とにかく避けないと！」

大げさなくらいに横に飛ぶ敵の召喚獣。その直後、瑞希ちゃんの召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボッ！

「きゃあぁぁーっ！」

「り、律子！」

左腕から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

『Ｆクラス　姫路　瑞希　ＶＳ　Ｂクラス　岩下律子＆ａｍｐ；菊入真由美（きくいりまゆみ）

数学　　４１２点　ＶＳ　１８９点　＆ａｍｐ；　１５１点　』

「おい、佚希どういうことだ？」

「簡単に言うと特殊能力だよ。たしか一定以上の点数を取った人の召喚獣は特殊能力を使える腕輪を装備して出て来るだったかな」

「お前は何で知っているんだ？」

「友に聞いたんだよ」

「ふーん・・」

僕らが話している間に瑞希ちゃんは残った相手を武器ごと一刀両断し、決着が一瞬でついていた。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Ｂクラスの驚愕な表情が浮かぶ。無理も無いか。

瑞希ちゃん、強すぎ。

召喚獣だったら哀川さんに勝てるかな・・・？

「み、皆さん、頑張ってくださいー」

瑞希ちゃんの指揮官らしくない指示。でも、これはこれで効果絶大みたいだね。

「やったるでぇーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

信者急増中。

「そろそろ戻るぞ俊希」

「もう少し見なくていいのか？」

「大体は見たしね。それにもうそろそろ坂本君の所にも戻った方がいいしね」

「かはは、んじゃ行くか」

そして僕らは教室へと引き返した。

＊＊＊

「・・・・うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯、だね」

教室に引き返した吉井君達を迎えたのは、穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープや消しゴムだった。

・・・まぁ、無理も無いよね。僕らも帰ってきた時にはこの状態だったし。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に支障はない」

「雄二がそう言うんならいいけど」

あ、吉井君気になってる。

なんか明久君って分かりやすいないろいろと。

「それはそうと、どうして雄二達は教室がこんなになっているのに気づかなかったの？」

「僕らはいろんな所を観察してきたからだよ」

「へ？Ｂクラスの人達もいたのに？」

「まぁ、いろいろとね」

ここは秘密にしておこう。

「俺は協定を結びたいという申し出があったからな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦状をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。

その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

明久君が納得した表情になった。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦争は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラス全体の戦力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

へぇ、よく考えてあるな・・

「だから受けたの？姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い」

たしかに都合はいいけど何かおかしいな。嫌がらせをするためだけに対等な条件を出してくるなんて何か裏があるとしか思えない。

「ねぇ、吉井君Ｂクラスの代表ってどういう人なの？」

「えっとねー・・・」

根本恭二（ねもと きょうじ）

とにかく評判が悪い。噂ではカンニング常連。目的の為には手段を選ばないらしい。

曰く『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物は当然装備（デフォルト）』など。

ある意味凄いな・・・

「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

そう言って秀吉君は教室を駆け足で出て行った。

「ん。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

手を挙げる坂本君に背を向けて吉井君は秀吉君を追いかけて駆け出していった。

じゃ、僕も僕なりに情報を集めてこよっかな。

そして僕は携帯電話を取り出し、発信履歴からとある人物に電話をかけた。

第5問　Bクラス戦！一日目前半（後書き）

作者「・・・・・」
いーちゃん「どうしたんですか？」
作者「いや何も無いんだけどねただ・・・」
いーちゃん「ただ？」
作者「自分が考えていた日付より遅かった・・・」（泣）
いーちゃん「あえて聞かないようにします」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3990t/

バカと欠陥製品と人間失格

2011年6月27日20時23分発行